

長崎華商泰益號關係書簡目錄

第 六 輯

長 崎 華 僑 研 究 會

(年 報、1990 年 號)

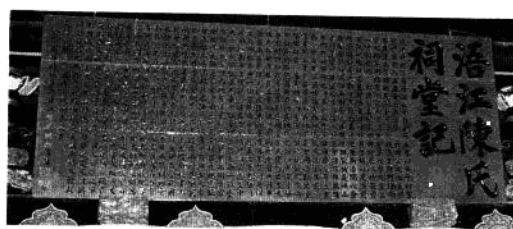
I 金門商人のネットワーク



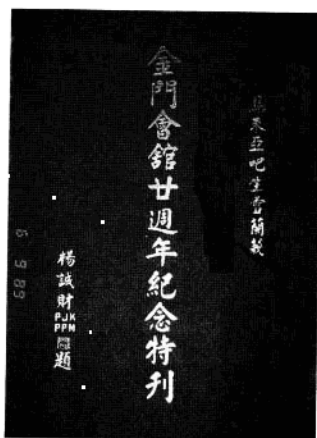
シンガポールの金門会館（世界一を誇る）



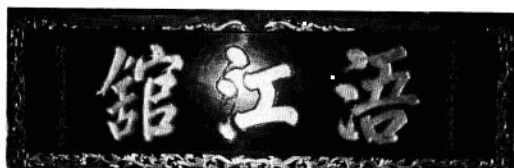
台湾彰化にある金門同郷会



金門出身の陳氏は「浯江陳」を名のる



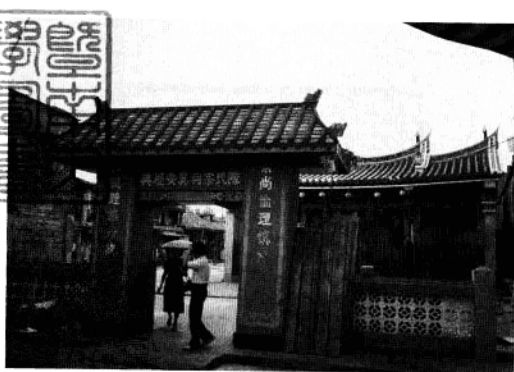
マレーシア、クアラルンプール郊外の「金門会館」
（マニラにもあるといわれたが確認できなかった）



金門会館は別名「浯江館」ともいう
（台湾東港にて）



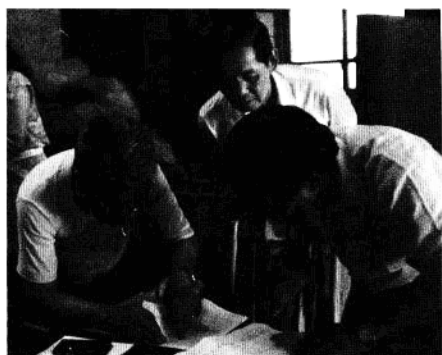
中国広州にある「陳氏書院」やや小規模のものが
マレーシア、クアラルンプールにもある



金門陳氏の中心「陳氏宗祠」——金門島にて——

（注）1987～89年訪問の都度撮影 一市川一

II 泰益號文書（帳簿と書簡）による交易埠址の探訪



郭怡美の旧店舗。廃業後、1986年までは子孫が住んでいたが、今はあき屋となっていた。（1989年）



旧高雄駅前に50年以上在住のⓈ運送店黄隊氏
泰益號書簡に見える葉錦墩氏は蘇有備氏の店の横
に店舗をもっていた。

上写真右から蘇氏、王賢徳氏、蔡文龍氏、蘇有備氏

下写真、葉錦墩氏の旧店舗。前に立っているのは黒木



20世紀初め（1914～33年）に泰益號と取引のあった台北迪化街の捷茂行のあと。



泰益號の帳簿『台灣總部』の中に見える捷茂號。
上段が収入、下段が支出の項目であり、己巳（1929）年の泰益號とのとりひきの様子がわかる。



迪化街訪問調査状況90才の古老を訪問
右から王賢宗（台北師大教授）陳文通（泰益號直系）市川

Ⅲ 交易の相手先は主に閩南人



アモイの目抜き通り、東南アジアの中華街の原形がみられる（1988年）



フィリピンマニラの中華街（1989年）



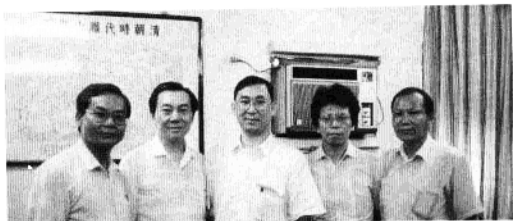
シンガポールの中華街、再開発で姿を消す前の姿（1986年）



台北市の商店街（廬化街）昔のままの建物が並ぶ（1988年）



旧高雄駅（高雄港車站）は、かつて問屋街に隣接し、にぎわっていた。左から鼓山区役所の蔡文龍氏、黒木、林再耀氏。



高雄市文献委員会のご指導、ご協力をいただいた。左から高雄師範大教授王賢徳博士、文献委員会楊伺着生執行秘書、黒木、馮彼得氏、呉岳璋。



山東半島煙台市内に残る媽祖宮福建商人漢民のシンボル（1990年）



シンガポールチャイナタウンの地図

マイケル黄氏提供

IV アジア各地・活躍する泰益号の眷族たち



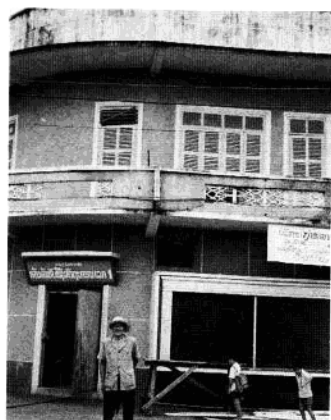
上 シンガポール在住の陳氏の親族（1987年）



上左 台湾の陳団治（中央）、陳蘇玉（左）と市川（1987年）

上右 大阪の陳東海一族（前列左より）長男、長女、東海氏夫妻と陳東和氏夫人（1988年）

上・下 香港の貿易事務所にて、長兄の陳東栄氏、座っている人（1988年）



↑ 右からスワニー（長男の嫁）、アビヌン（次男）ピンユ（夫、バンコク市議）アルニー（妻の兄の子）タニツト（長男）サラン（長男の子）ピニタ（妻、七太郎の孫）スパボン（次女）タイ・バンコク市郊外チョンブリにある高山七太郎（陳世科）長女の墓と墓参りに集った親族たち、いずれもタイ籍華人。

← ラオスの首都ビエンチャンにあるタダ氏—タイ籍（陳世科＝高山七太郎の長女の三男）が経営した店舗の前に立つ高山勝次郎氏（七太郎の次男）（1989年）

V 泰益号研究会活動の点描



長崎華僑研究会、泰益号文書の研究を中心にスタート（1984年）、1987年のメンバー、前列左より四人目、木津悟眞寺住職五人目宮田会長



台湾中央研究院三民主義研究所歴史組（当時）との国際学術研究がスタート前列左曹永和教授（1988年）



宮崎大学にも泰益號文書研究会が発足した。（1986年）前列右より山内、松本、福宿、後列右より黒木、小沼、山内



1989年九州華僑華人研究会へと発展、前列左より市川（九国大）中村（九大）鄒（財経大）和田（九国大）後列左より徐（九大）黒木（宮崎女短）朱（三民研）劉（九大）柳田（九国大）



九州国際大学における「泰益號文書を読む会」前列左より黒田、鄒、邵、ウオン、陳、後列より市川、軍司、柳田の各氏（1989年）



中国福建省泉州華僑大学とも共同研究がスタート、その打合せ、左より劉、陳、市川、庄、蔡揚の諸氏（1990年華大にて）

Ⅶ <余滴> 6・30事件（1965年）で姿を消したと思われたインドネシア華僑がメダン市の一角に証跡を残していた（1990.8）



↑ ①



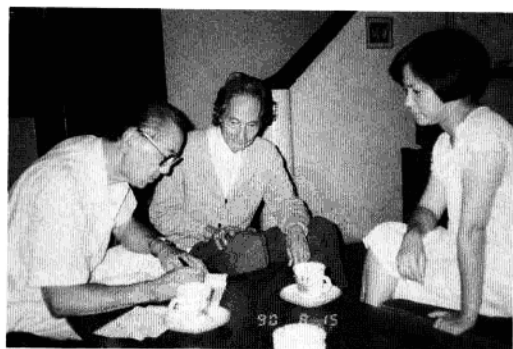
②→



③



④



⑤

<説明>

①北スマトラメダン市

リンクンガン街Ⅳ—705に残るオランダ植民地時代のメジャー張家の建物、その前に立つ市川と白川（左）

②③張夫妻（1920年ごろの写真）張氏の胸の勲章の一つは日本政府から贈られていた

④同家の祖先（広東・潮汕出身）の祭壇

⑤同家の訪問調査状況 左より白川、氏張、氏張さんとその長女、（いずれも1990年夏市川撮影）

序 文

長崎華僑研究会年報の第6輯であるが、十八銀行の社会開発基金が5カ年で打切りとなったので、本号が年報の最終号となった。

本号は前編と後編に分けている。

前編には次のものが掲載されている。

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| ●在日閩南系華商の台湾海峡兩岸交易に関する総合的研究への道程 | 市川 信愛 |
| ●華僑史研究をめぐる諸問題 | 斯波 義信 |
| ●長崎福建会館の活動試論 | 黒木 國泰 |
| ●長崎における華僑の祭祀文書について | 劉 序楓 |
| ●長崎華商泰益号の経営帳簿についての口頭発表内容 | 許 紫芬 |
| ●關於近代長崎華商「泰益号」書簡 | 朱 徳蘭 |

後編には、泰益號書簡目録（総集）が掲載されている。

これは可なり多数の書簡を掲載しているので将来いろいろの観点からの研究対象になることだろう。

前編中の劉序楓氏の論文に指摘されているように、崇福寺後山の壽林院跡唐人墓地に、三山公所立とはつきり刻んだ唐人墓碑が12基あり、内明治14年（1881）が10基、明治18年が1基、明治21年（1888）が1基である。臥雲庵跡唐人墓地に三山公所立が9基あり、内明治14年（1881）が4基、年次不明が5基である。この下の道路そばに三山公所立、年次不明の2基がある。

合計23基に及ぶ三山公所立があるので、明治14年から21年にかけて三山公所が存在したことは確認できよう。

誰かが明治32年（1899）に三山公所が新地に建設されたというのが疑わしい。

八閩会所の下部機関として三山公所があったのか、あるいはまた、八閩会所は泉漳幫の機関で、別に福州幫の三山公所があったのではないかという疑いさえも成立し得る。

華僑史の先驅的研究として定評がある故内田直作教授の著作なども、こと唐寺に筆が及ぶあたり首をかしげたところが多い。

盂蘭盆うらはん…略…江戸時代には7月13日から15日までを盂蘭盆とした。農閑期の都合から、ある地方では旧暦によって行ない、関西地方などでは、8月の同一日に行なう。…略…

（中村元『佛教語大辞典』上90頁）

蘭盆勝會らんばんしょうえ……中国寺院である長崎の崇福寺で、お盆会のことをいう。旧暦7月26日から28日までの3日間に華僑が集まり祖先の供養をする。

（中村元『佛教語大辞典』下1408頁）

故薛春花さんは、「普度（蘭盆勝會）は全世界の有縁無縁の靈を、人類は勿論のこと、動物の靈まで慰めるのだ。祖先を供養する盂蘭盆（お盆）は、日本人と同じように家庭で行なっている」とのお話であった。先日とある華僑の方に聞くと、うちではお盆はしていないとのお答えである。祭も何もかも変化してゆく。

華僑研究会代表 宮 田 ^{やすし}安

（1990・10・16）

<附 記>

本印刷費の一部に、三菱財団研究助成金（代表 市川信愛）及び泰益号の子孫の方々よりご寄付をいただいたことを附記する。

1. 凡 例

この目録は、長崎市立博物館保存の「泰益関係文書」のうち、書簡数—ハガキを含む—（日・中文）について、発信人別に、日本語読みの50音順に整理、分類したものである。

既に公刊した一部のもの、書簡類中、封筒の中央に朱線の入った中国伝来の形式と、普通一般に用いられる形式とは別個に目録を作成していたが（1986年、1987年）利用者の便を考えて一本化し、拾遺を加え、更にハガキ（日中文）を追録して一本化したものである。「総集」とした所以である。

ただ、前・今回の目録については台湾・中国の利用者からは、日本語の発音読みであるため、利用者が不便だから、この際台湾側で発信地（本目録は発信者）で作成する計画がある旨の連絡をいただいた、勿論歓迎するところである。属人と属地は、その読み方のちがいはあるにせよ、相互に補完し合い、利用者の便を一そう増加するものとする。

一方、経営ないし僑団関係の簿冊類については、既に元博物館長の杉村邦夫氏の手によって作成され、長崎華僑研究会（年報第一集・1985年）と科研費『長崎華泰益号関係文書の研究・第一集』（昭和59年）として発刊した。その分類記号は、今日も充分利用に耐えうるものであるし、既に学術論文等にも、同目録に準拠した引用がなされていることから、改めて加筆することはひかえた。もし将来、要望があれば、復刻することは考えられるし、その際には刊本類（印刷されたもの）についての追録は必要であると考えられる。

尚、未着手、未整理のものとしては証文書の文書類（墨書されたものが担当数あり、様式は1～数枚のバラバラの紙片が大部分）があり、英文の信書類とかなりの数に登る名刺等があり、これは特殊な整理技術が必要なことから、将来の懸案として残した。博物館内での人員や予算のメドがつくことがあれば、博物館にお願いしたいと思う。

従って、同文書については、未だラベリングによる請求記号等が作成されていない。幸い簿冊類については、マイクロフィルム化がほぼ完了していること、書簡類については、コピー（一部縮少）を逐次進めており、複本が博物館内と、九州国際大学国際商学部市川研究室に各1部づつそなえてあり、利用者に公開されている。また、マイクロフィルムの一部は、大阪大学文学部東洋史研究室（濱島教授）にも保管されていることを附記する。

尚、本書簡目録中、番号に○のついたものは、ハガキを、そうでないものは封書を意味している。勿論、将来遺漏が発見された場合、その都度補正を行うつもりである。

（市川記）

2. 地域（埠）別差出人数と書簡数

区 分	取 引 店 数	信 書 数	1店当り信書数	% (枚)	% (店)
長 崎	465	1,445	3.1	35.20	19.54
神 戸	385	2,426	6.3	29.14	32.81
大 阪	53	135	2.5	4.01	1.83
京 都	7	11	1.6	0.53	0.15
横 浜	16	84	5.3	1.21	1.14
東 京	60	105	1.8	4.54	1.42
下 関	69	951	13.8	5.22	12.86
鹿 児 島	30	75	2.5	2.27	1.01
八 幡	1	1	1	0.07	0.01
佐 世 保	2	2	1	0.15	0.03
門 司	75	1,733	23.1	5.68	23.44
熊 本	2	34	17	0.15	0.45
広 島	6	8	1.3	0.45	0.11
島 原	2	4	2	0.15	0.05
大 分	5	12	2.4	0.38	0.16
五 島	2	2	1	0.15	0.03
豊 橋	1	4	4	0.07	0.05
奈 良	1	1	1	0.07	0.01
川 崎	1	1	1	0.07	0.01
諫 早	1	1	1	0.07	0.01
小 倉	1	1	1	0.07	0.01
日 向	1	1	1	0.07	0.01
名 古 屋	3	5	1.6	0.23	0.07
愛 知	1	1	1	0.07	0.01
北 松 浦	1	6	6	0.07	0.01
静 岡	2	2	1	0.15	0.03
別 府	2	2	1	0.15	0.03
和 歌 山	3	4	1.3	0.23	0.05
茨 城	2	5	2.5	0.15	0.03
種 子 島	13	39	3	0.98	0.53

区 分	取 引 店 数	信 書 数	1店当り信書数	% (枚)	% (店)
豊 後	2	1	0.5	0.15	0.01
若 松	2	2	1	0.15	0.03
宮 崎	2	2	1	0.15	0.03
長 野	2	4	2	0.15	0.05
山 口	5	11	2.2	0.38	0.15
福 岡	41	184	4.5	3.10	2.49
函 館	11	17	1.5	0.83	0.23
佐 賀	13	36	2.8	0.98	0.48
沖 縄	3	3	1	0.23	0.04
岡 山	2	2	1	0.15	0.03
伊 豆	1	1	1	0.07	0.01
千 葉	1	1	1	0.07	0.01
小 樽	3	3	1	0.23	0.04
久 留 米	4	3	0.8	0.30	0.04
富 山	1	1	1	0.07	0.01
兵 庫	2	2	1	0.15	0.03
呉	1	1	1	0.07	0.01
宮 津	1	1	1	0.07	0.01
大 村	2	1	0.5	0.15	0.01
備 中	1	1	1	0.07	0.01
肥 前	4	13	3.3	0.30	0.18
備 前	3	2	0.7	0.23	0.03
薩 摩	1	1	1	0.07	0.01
(内 地 計)	(1321)	(7394)	(5.6)	(100.00)	(100.00)
樺 太	1	3	3	—	—
釜 山	37	253	6.4	46.25	53.83
仁 川	16	79	4.9	20.00	16.81
京 城	10	24	2.4	12.50	5.11
金 浦	3	17	5.7	3.75	3.62
安 城	1	1	1	1.25	0.21

区 分	取 引 店 数	信 書 数	1店当り信書数	% (枚)	% (店)
成 興	1	1	1	1.25	0.21
元 山	1	2	2	1.25	0.43
那 山	1	欠	—	1.25	—
馬 山	1	1	1	1.25	0.21
慶 南	2	3	1.5	2.50	0.64
乍 浦	5	88	17.6	6.25	18.72
その他の朝鮮	2	1	0.5	2.50	0.21
(朝鮮半島計)	(80)	(470]	(5.88)	(100.00)	(100.00)
基 隆	247	・ 1,787	7.2	12.74	8.53
台 北	1,015	15,369	15.1	52.35	73.38
淡 水	4	32	8	0.21	0.15
新 竹	34	122	3.6	1.75	0.58
台 中	68	209	3.1	3.51	1.00
嘉 義	34	68	2	1.75	0.32
彰 化	15	18	1.2	0.77	0.09
台 南	364	2,766	7.6	18.77	13.21
高 雄	40	121	3.0	2.06	0.58
屏 東	1	1	1	0.05	0.005
東 港	2	2	1	0.10	0.01
澎 湖	31	126	4.1	1.60	0.60
大 稻	1	21	21	0.05	0.10
鹿 港	13	18	1.4	0.67	109
宜 蘭	3	1	0.3	0.15	0.005
彰 仕	1	1	1	0.05	0.005
豐 原	11	66	6	0.57	0.32
北 港	5	14	2.8	0.26	0.07
員 林	9	33	3.7	0.46	0.16
苗 栗	5	8	1.6	0.26	0.04
斗 六	1	欠	欠	0.05	—
北 斗	3	7	2.3	0.15	0.03

区 分	取 引 店 数	信 書 数	1店当り信書数	% (枚)	% (店)
中 壩	2	8	4	0.10	0.04
花 蓮	1	欠	—	0.05	—
西 螺	2	欠	—	0.10	—
台 東	1	2	2	0.05	0.01
鳳 山	4	53	13.3	0.21	0.25
苗	1	欠	—	0.05	—
葫 芦 墩	1	1	1	0.05	0.005
その他の台湾	20	91	4.6	1.03	0.43
(台 湾 計)	(1,939)	(20,943)	(10.8)	(100.00)	—
厦 門	125	2,078	16.6	17.22	20.10
広 東	2	2	1	0.28	0.02
香 港	82	1,054	12.9	11.29	10.20
上 海	239	5,763	24.1	32.92	55.75
安 東	1	1	1	0.14	0.01
寧 波	5	25	5	0.69	0.24
新 京	3	7	2.3	0.41	0.07
芝 罘	1	4	4	0.14	0.04
營 口	14	173	12.4	1.93	1.67
北 京	6	7	1.2	0.83	0.07
天 津	19	138	7.3	2.62	1.33
山 東	2	2	1	0.28	0.02
奉 天	1	1	1	0.14	0.01
蘭 州	1	1	1	0.14	0.01
福 州	7	60	8.6	0.96	0.58
鞍 山	1	1	1	0.14	0.01
山 西	2	2	1	0.28	0.02
油 頭	2	3	1.5	0.28	0.03
福 建	11	38	3.5	1.52	0.37
泉 州	1	1	1	0.14	0.01
吉 林	1	1	1	0.14	0.01

区 分	取 引 店 数	信 書 数	1店当り信書数	% (枚)	% (店)
蘇 州	2	9	4.5	0.28	0.09
烟 台	7	32	4.6	0.96	0.31
大 連	33	229	6.9	4.55	2.21
阪 荘	2	3	1.5	0.28	0.03
歳 口	3	13	4.3	0.41	0.13
金 門	122	549	4.5	16.80	5.31
南 京	2	2	1	0.28	0.02
永 楽	1	3	3	0.14	0.03
中 国	4	6	1.5	0.55	0.06
瀘 南	2	8	4	0.28	0.08
申 江	5	21	4.2	0.69	0.20
瀘 江	1	1	1	0.14	0.01
林 前 郷	1	4	4	0.14	0.04
寓 浦	1	2	2	0.14	0.02
中 部 葫	1	1	1	0.14	0.01
掲 邑	1	2	2	0.14	0.02
台 那	1	1	1	0.14	0.01
省 城	1	1	1	0.14	0.01
琼 林	1	1	1	0.14	0.01
歙 浦	1	2	2	0.14	0.02
歳 荘 (庄)	2	17	8.5	0.28	0.16
寓 歳	1	16	16	0.14	0.15
鎖 邑	1	1	1	0.14	0.01
腐香 (舌港)	1	1	1	0.14	0.01
東 甌	1	1	1	0.14	0.01
滬 南	2	50	25	0.28	0.48
(小 計)	(726)	(10,338)	(14.2)	(100.00)	(100.00)
進 京	1	1	1	3.03	0.24
遷 羅	1	1	1	3.03	0.24

区 分	取 引 店 数	信 書 数	1店当り信書数	% (枚)	% (店)
海 参 崴	5	75	15	15.15	17.77
安 南	1	3	3	3.03	0.71
梹 城	1	7	7	3.03	1.66
爪 哇	1	1	1	3.03	0.24
新 嘉 坡	17	325	19.1	51.52	77.01
七 星	1	2	2	3.03	0.43
小 呂 宋	5	7	1.4	15.15	1.66
(南 洋 計)	(33)	(422)	(12.8)	(100.00)	(100.00)
東 石	※	4			
小 東 門	※	2			
その他の中国	※	155			
不 明	※	608			

※は判読不能の字が多いため未集計のままとした。

書簡からみた泰益号の商圈は、台湾、内地、大陸、朝鮮半島、南洋の順であることが店舗数、信書数で判断される。そのうち交易の拠点は台北、台南、基隆、神戸、門司、下関、長崎、上海、厦門、香港の10港であった。

3. 台湾台南地区店舗調査状況

陳文通氏が台南市石萬壽氏宅を訪問した折の話

(1984年7月)

台南の「泰益號」関係会社については、全部見つけることは、できなかったのです。1～2だけは見つかりました。

金 義興（食品雜化店）

主人 王 強

子 王育哲 現在の職業は、弁護士

住所→台南市民權路96號

金 源益（海産物店）

石萬壽先生の母さんの父さんの店、中国語では（外祖父）

住所があれば探すのが容易ですが、しかし台南では同じ名前の店も少なくありません。当時の状況を聞かなければ80才ぐらいの老人に聞かなければなりません。当時の住所でも結構ですから、こちらには清末時代から現在までの地図や住所の照合表があります。

資料を送られたら、その資料に基づいて、店の住所なり、子孫なり見つけてさしあげます。（台南市の事ならほとんどと言っていいほど知っています。）

住所か地図があれば100%とは言いませんがほぼ見つかります。

もし、不明瞭な点がありましたら、お年寄りなどに聞きます。なぜなら、私はここで多くのお年寄りを知り合いでありますから。

当時の商人は、福岡、北海道などの海産物を台湾に売っていました。鮑（あわび）、イカ、貝柱（かばしら）など

そして、日本語を話し正直であって、とても有能であった一人の華僑を私の外祖父が雇い入れたのでありました。

そして、私の外祖父の店がだんだんと発展して大きくなり、そして日本へ彼を派遣して、対日、対台湾の商売を始めたのです。そして、日本で海産物などを買い台湾へ輸出したのです。

当時私の外祖父は、3人の兄弟の末子でした。そして3人が商売について、責任分担しておりました。卸し売り業でありましたから何時でも宴会がたえずおこなわれていました。（飯喜・酒喜←中国語で宴会のこと）朝客人が来てから帰えるまでずっと宴会をしていたそうです。

なぜならば、お客は遠方から仕入のために来るのです。当時の交通機関は、現在と違って列車、車などがなかったのです。

そして、また台湾の会社（公司）では、経営主が死ぬと財産の奪い合いがとても激しいのです。財産を奪った者が勝ちです。

結局は、物を売り、儲けたお金を一人じめすることなんです。

あなた方は、「泰益號」の資料、帳簿などを今まで残す事ができたのは、とても偉大なことです。なぜならば、当時の帳簿関係は、現在と同じ様に表帳簿と裏帳簿が存在していました。多くは税金逃れのために表帳簿を作り、決算、納税終了後、証拠隠滅のために、それらを焼き捨てるのです。

長崎であなた方の祖先「泰益號」を研究してくれるのは、とても幸福であります。でも、先にすべての資料を私に送って来て下さい。そして、それらを本などにすべきです。例えば手紙の例で筆記体を活字体になおすとか、もしあなた方がこの研究について、ほんとうにやる気があればまずこう言う仕事を先にやらねばいけません。

また、この研究については、すぐ行動に移さなければなりません。なぜならば、お年寄りなどの寿命

は長くありません。

初めて、私は一軒の屋号を探しに老人を訪ねましたが、不明瞭な点があったのでまた次の機会に会いにいったところ、すでに老人はもう亡くなっていたこともあります。

石萬寿氏（成功大学歴史学副教授、台南市在住）から陳文通氏への手紙の一部

① 永茂号

現在の和華街で、「南北貨」＝輸入雑貨を扱う。店主は張江攀。終戦当時（1945年）は存在していたが、1950年の初め終業。

② 和春号

忠孝街で、布地商を営む。現在は織布工場を経営しているが、経営者は更替している。

③ 金源益

安平路で、「輸入商品」を扱う。店主は李甲（明星と号す）といい筆者の外祖父に当る。1930年ごろ終業。

④ 榮齊号

民権路で、布地商を営業、店主は石秀芳といい筆者の母親の姉妹の夫に当る。1940年ごろ終業。

⑤ 金瑞珠※

安平路で「南北貨」を営む。1925年ごろ終業。

⑥ 和記号※

忠義路にあり、布地商を営む。今も既成服貿易商として存続している。

⑦ 新玉記

宮後街にあり、油商を営む。1940年ごろ廃業。

⑧ 一両金※

安平路にあり、「南北貨」（輸入雑貨）を営む。1950年ごろ廃業。

⑨ 金義興※

民権路にあり、「南北貨」を営む。1950年ごろ廃業。

⑩ 永發号※

関帝廟の近くにあり、「南北貨」を営み、1954年ごろ停業。

⑪ 金捷發

和平街にあり、□仔貨（土地の産物：台湾の方言）、1940年ごろ停業。

⑫ 震順号

民権路にあり、布地商を営む。1945年ごろ停業。

⑬ 全合義

官後街にあり、布地商を営む。1940年ごろ停業。

⑭ 捷豐号※

民権路にあり、土産の雑貨商を営む。
1940年ごろ停業。



台南石萬壽氏宅にて
一族は世界各地に分
散している（1985年）